

精神の境界線：「精神科医の当事者研究」という試み

山田悠至

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター病院
東京大学大学院 総合文化研究科

精神に境界線を引くことは如何なる意味において可能か、そして精神科医は何を拠り所として境界線を引くのか。この問いを社会、医学、科学の相互関係に着目し、探求することが本発表の目的である。そこで本発表では、「診断」という行為に着目する。いかなるマニュアルが精神科医の目の前にあったとしても、目の前の患者との直接的なコミュニケーションのもと、その患者自身に語ってもらい、その語りのなかの「現実」に近づこうとしなければ「診断」はできない。そして、そこではマニュアルのアルゴリズムでは掴み切れない重層的で流動的な「現実」が立ち上がるのであり、「診断」という営みを理解するには社会、医学、科学の交差点に身を置く精神科医を当事者研究する必要があるのである。

本発表では、精神に境界線を引くことの可能性と限界を考察する。具体的には、「診断」という営みが社会、医学、科学のどの立場からも単眼的、固定的に行うことが出来ないこと、そして「診断」は社会、医学、科学という異なる立場の間を行き来しつつ複眼的、流動的に営まれざるを得ないことを示す。さらに、精神科医がこうした複数の概念枠組みの間を行き来する中で、時に自身の立ち位置を見失いそうになりつつも「診断」時の風景を当事者研究として描写することで、社会、医学、科学の周縁から各々の世界の構造を逆照射する形で浮き彫りにすることが、本発表のもう一つの狙いである。